仙台市立病院医誌　20, 135-136, 2000

研修記

サンフランシスコ・エイズ研修に参加して

内科　山　陰　　敬

今回各方面のご配慮によりHIV/AIDSのサンフランシスコ研修に参加する機会を頂いたことに深く感謝している。AIDSの世界初例を報告したカリフォルニア大学サンフランシスコ校(UCSF)と関連施設のサンフランシスコ市立総合病院(SFGH)で学んだが，プログラム責任者のフェルドマン先生を初め，受け入れ側の講師の先生方やコーディネーターの方々には非常な熱意と愛情をもって指導して頂き，実りある研修となった。

出発は9月11日（土），午後2時に成田空港に集合，同行するのはあと3名でいずれもAIDS拠点病院の感染症科ないしは血液免疫科の先生方だった。4時半発の日航機でサンフランシスコ(以下SF）には現地時間9月11日（土）午前9時半に到着した。迎えのリムジン（初めて乗った）で宿舎のホテルへ直行。そこにはコーディネーターの小林まさみ氏が待ちかまえており，時差ボケで眠い目をこすりながら早速オリエンテーションとミーティングを受けた。この小林さんは20年来SFのエイズ問題にかかわっている方で，夫君のディヴィッド氏もフェルドマン先生の片腕としてこのプログラムのマネージャーを務めている。小林さんは福祉制度の専門家でもあり著書も多く，実際の講義も受けた。プログラムは2週間みっちり組まれており，予防，診断，治療，合併症の治療，福祉制度，地域の患者ケアなど多岐に亘っている。入院病棟，外来の診療現場，保健所，地域のコミュニティーなどの現場見学も盛り込まれている。また，ボランティアの患者さんから体験談をじっくり聞く時間も設けられていた。中でも予防の根幹を成すスタンダード・プレコーションの徹底は講義でも実習でも繰り返し強調された。UCSFもSFGHも設備面がすばらしい。診察室，病室とも壁が厚い個室でプライバシーが完全に守られている。診察の様子が筒抜けの本院から見るとうらやましい限りだ。

診断と予防については，フェルドマン先生に講義を受けた。サンフランシスコでは緊急の予防策（一にも二にもコンドーム着用）が功を奏して1982年をピークにHIV感染率が減り，1992年を境にAIDS発生率も減ってきたことは輝かしい成果と思われる。また，具体的な治療法と日和見感染の代表であるカリニ肺炎については，AIDS診療の経験が極めて深い日系三世のトクモト先生より，豊富な実例に基づいた講義を受けた。あとは市内のクリニックでAIDS患者の外来治療の現場を見学したのも印象深かった。特筆すべきはサンフランシスコではAIDS患者を地域でケアしていくシステムが確立していることである。ソーシャル・ワーカー，カウンセラー，栄養士，訪問看護婦，宗教家，ボランティアなどの人々が有機的に連携して一人一人の患者さんを支えているのに感銘を受けた。また，スタンダード・プレコーションを厳格に守ることがHIVのみならず，各種感染症の伝染を防ぐ決め手であることを学んだ。この点は日本では全く遅れており徹底が急務である。また不幸にして暴露があった場合もその後の発症予防対策が確立していることにも関心した。これらを通じ，AIDSといえども数多い感染症

Presented by Medical*Online

の一つであって，なんら特別視する必要はないことを学んだ。

SF は気候がよく街並も美しい。残暑の日本に比べ，実にさわやかだった。休日には湾内クルーズ，ゴールデンゲート・ブリッジやベイ・ブリッジめぐり，チャイナタウン散策など観光も大いに楽しんだ。SF では白人の人口比が 40% と少なく，東洋系アメリカ人とヒスパニックが多い。また白人の中ではイタリア系が多いとのことだ（強打者ジョー・ディマジオも SF 出身のイタリア系）。したがって街には至るところに各国料理のレストランがあり，20 ドルも払えば美味しい夕食が食べられる。中華料理は言うまでもなく地中海料理，ピザ，タイ料理，ベトナム料理などを楽しんだ。レッド・フックという地元のビールやカリフォルニア・ワインもうまかった。

HIV/AIDS の臨床と研究では世界最高水準の UCSF と SFGH で研修できたことは幸いであった。この経験を今後の診療に生かしていきたい。

Presented by Medical*Online